様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　５ 月　８ 日現在

機関番号：３３７０５
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ１３３３３

研究課題名（和文）反すうと衝動性：相互増強効果と抑うつを強める過程の検討

研究課題名（英文）Depressive rumination and impulsivity: Examination of the process how these variables intensify depression.

研究代表者
長谷川　晃（Hasegawa, Akira）

東海学院大学・人間関係学部・准教授（移行）

研究者番号：００６１２０２９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：研究1では，反応抑制の困難さがネガティブな出来事の経験頻度の増加を介して反すうを促すことが示された。研究2では，反応抑制の困難さが攻撃行動を増加させ，対人関係に関するネガティブな出来事の経験頻度を増加させることを介して反すうを促す一方，注意の抑制はいずれとも関連しないことが示唆された。研究3では，ネガティブな出来事を対人領域とそれ以外に分け，かつ，本人の行動や特徴が何らかの形で関与している従属出来事と，本人が関与していない独立出来事に分けて測定するネガティブな独立・従属出来事尺度が作成された。研究4では，攻撃行動がその後8週間に経験されたネガティブな対人従属出来事を増加させることが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
実行機能の分類や役割については，多くの研究者が長年に渡って議論を続けてきたが，未だ結論が出ていない。本研究において，抑制機能の下位分類と反すうとの関連や，その関連が生じる過程が示唆されたため，実行機能の分類や役割に関する議論に一石を投じることができた。また，本研究の結果，反応抑制の困難さが反すうと関連することが示されたため，反すうをしやすい者の中に，反応抑制の困難さを補う介入を受けることが有効である一群が存在することが示唆される。さらに，本研究で作成されたネガティブな独立・従属出来事尺度は，今後，日本でのストレス生成仮説の検証を目指した研究の推進に貢献できると考えられる。

研究成果の概要（英文）：Study 1 showed that response inhibition deficits were positively associated with trait rumination via increases in negative events. Study 2 suggested that the relationship between response inhibition deficits and trait rumination was mediated by increases in aggressive behaviors and negative interpersonal events. On the other hand, attentional inhibition deficits were not significantly associated with aggressive behaviors, negative events, and trait rumination. In Study 3, the Negative Independent/Dependent Events Scale was developed to assess experiences of negative interpersonal dependent events, negative non-interpersonal dependent events, and negative independent events in university students. Study 4 showed that aggressive behaviors increased negative interpersonal dependent events that each undergraduate and graduate student experienced during the 8-week follow-up period.

研究分野：臨床心理学

キーワード：反すう　抑うつ　実行機能　抑制機能　反応抑制　衝動性　攻撃行動　ストレス生成

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

反すうとは，自己の抑うつ症状や，その状態に陥った原因・結果について消極的に考え続けることを指す(Nolen-Hoeksema, 1991; Watkins & Roberts, 2020)。先行研究の結果，反すうは抑うつ症状の持続・重症化やうつ病の発症・再発と関連することが示唆されている(レビューとして，Nolen-Hoeksema et al., 2008; Watkins & Roberts, 2020)。

近年行われた研究により，衝動性が反すうと関連することが示唆されている。衝動性とは，軽率な行動を行う傾向，熟考をせずに行動する傾向，飽きやすさなどを包含した概念である。衝動性は質問紙や，パソコンを使用した実験課題で測定されるが，質問紙を用いた少数の先行研究により，反すうと衝動性の関連が示されている。例えば，衝動性の 5 次元を測定する質問紙である UPPS-P Impulsive Behavior Scale を用いた研究では，反すうとネガティブな緊急性やポジティブな緊急性(ネガティブ感情やポジティブ感情が喚起された際に軽率な行動を取ってしまう傾向)は相互に増強し合う関係にあることが示された(Hasegawa et al., 2018; Valderrama & Miranda, 2017; Valderrama et al., 2016; Wang & Borders, 2018)。更に，注意欠如・多動傾向と自閉スペクトラム傾向の各側面のうち，特に多動性―衝動性が反すうと正の関連にあることが示された(Horibe & Hasegawa, 2020)。

以上の結果より，質問紙を用いて衝動性を測定した場合，衝動性の一側面である，自身の不適切な反応を抑制する困難さ(以下，反応抑制の困難さ)が反すうと関連することが示唆される。しかし，実験課題を用いて反応抑制の困難さを測定した研究では，反すうと衝動性の間に有意な関連が認められていない(Aker et al., 2014)。

２．研究の目的

質問紙を用いた研究では，参加者の意図的・無意図的な回答の歪曲が測定結果に影響を及ぼしている可能性がある。一方，実験課題を用いて衝動性(特に，反応抑制の困難さ)を測定した先行研究では，各課題の成績をそのまま用い，衝動性と反すうの関連を検討した点に問題がある。Miyake et al. (2000)は，実行機能を測定する実験課題の成績には，課題に特有の誤差が関与しているが(例えば，刺激の色を識別する速さ)，同一の機能を測定する複数の課題の用い，それらの課題の成績に影響を与える潜在変数を構成することにより，より厳密に実行機能を測定できることを示唆した。この潜在変数アプローチは，反応抑制の困難さを対象とした研究にも適用されている(MacKillop et al., 2016)。潜在変数アプローチを適用することにより，反すうと反応抑制の困難さの関連について，より厳密な検討を行うことができるだろう。

また，先行研究では，反すうと反応抑制の困難さがどのようなメカニズムを経て関連するのかについて検討が行われていない。例えば，反応抑制が困難である者は，攻撃行動を抑えることができないために，対人関係におけるストレスフルな出来事を経験しやすく，その結果，反すうを経験しやすいことが考えられる。さらに，先行研究では，反応抑制と同じく，抑制機能の一部であると考えられている注意の抑制をも取り上げ，反応抑制と注意の抑制が反すうに及ぼす影響について比較がなされていない。

以上を踏まえ，本研究では反すうと反応抑制の困難さの関連を検討した上で，その関連を媒介するメカニズムについて検討することを目的とする。また，反応抑制と注意の抑制という，同じ抑制機能の下位分類であると見なされている 2 つの機能と反すうとの関連について比較を行う。

３．研究の方法

研究 1：日本の 4 大学に在籍する学部生・大学院生 176 名を対象として実験を行った。参加者には，反応抑制の困難さを測定する Go/No-Go Task，Stop Signal Task，および Conners Continuous Performance Test 3rd Edition を実施した。また，参加者には，反すうや，過去 3 ヶ月間に経験されたネガティブな出来事を測定する質問紙に回答を求めた。

研究 2：日本の 4 大学に在籍する学部生・大学院生 213 名を対象として実験を行った。参加者には，反応抑制の困難さを測定する Go/No-Go Task と，注意の抑制の困難さを測定する Modified Stroop Task を実施した。また，参加者には，反すう，攻撃行動，および過去 3 ヶ月間に経験されたネガティブな出来事を測定する質問紙に回答を求めた。

研究 3：日本の 2 大学に在籍する学部生 247 名を対象として調査を行った。参加者には，本研究のために作成されたネガティブな独立・従属出来事尺度に回答を求めた。また，参加者には，抑うつ，重要他者に対する再確認行動，ADHD の 1 側面である不注意，および衝動性の 1 側面である忍耐の欠如を測定する質問紙に回答を求めた。

研究 4：日本の 4 大学に所属する学部生・大学生 201 名を対象に，8 週間から 9 週間の間隔を空けて 2 度調査を行った。参加者には，研究 3 で作成されたネガティブな独立・従属出来事尺度に加えて，反すう，抑うつ，および攻撃行動を測定する質問紙に回答を求めた。

４．研究成果

研究 1：共分散構造分析の結果，Go/No-Go Task，Stop Signal Task，および Conners Continuous

Performance Test 3rd Edition の 3 課題の成績から構成された「反応抑制の困難さ」という潜在変数が，ネガティブな出来事の経験頻度の増加を介して反すうを促すことが示された。

研究 2：パス解析の結果，反応抑制の困難さが攻撃行動を増加させ，対人関係に関するネガティブな出来事の経験頻度を増加させることを介して，反すうを促すことが示された。一方，注意の抑制は攻撃行動，ネガティブな出来事の経験頻度，および反すうのいずれとも有意な関連が認められなかった。

研究 3：本人の行動や特徴が何らかの形で関与している従属出来事(dependent events)のうち，対人関係と関連するネガティブな対人従属出来事は，特に重要他者に対する再確認行動と関連する一方，対人関係と関連しないネガティブな非対人従属出来事は，特に不注意と関連することが示された。なお，以上の従属出来事に加えて，本人の行動や特徴が関与していない独立出来事(independent events)は，すべて抑うつと中程度の相関が認められた。以上の結果から，ネガティブな独立・従属出来事尺度のある程度の構成概念妥当性が示された。しかし，重要他者に対する再確認行動との相関は，ネガティブな対人従属出来事とネガティブな非対人従属出来事とで有意な差が認められず，この 2 下位尺度の弁別という観点で課題が残された。

研究 4：1 時点目に測定された攻撃行動は、追跡期間に経験されたネガティブな対人従属出来事の増加と関連する一方，ネガティブな非対人従属出来事や独立出来事と有意な関連が認められなかった。また，１時点目の調査までに経験されたネガティブな対人従属出来事，ネガティブな非対人従属出来事，および独立出来事はすべて，2 時点目の調査で測定された抑うつの増加と関連する一方，1 時点目の調査で測定された反すうは，2 時点目の調査で測定された抑うつと有意な関連が認められなかった。以上の結果から，研究 1 と 2 で示唆された，反応抑制が反すうを強める過程における一部の変数間の因果関係が示された。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計18件（うち査読付論文　17件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　16件）

１．著者名 Hasegawa, A., Oura, S., Yamamoto, T., Kunisato, Y., Matsuda, Y., & Adachi, M.	４．巻 －
２．論文標題 Causes and consequences of stress generation: Longitudinal associations of negative events, aggressive behaviors, rumination, and depressive symptoms	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Current Psychology	６．最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s12144-022-02859-9	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 豊村美咲・長谷川晃	４．巻 15
２．論文標題 インターネット上の攻撃行動と現実場面での攻撃行動の規定因の差異	５．発行年 2021年
３．雑誌名 東海学院大学紀要	６．最初と最後の頁 61-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24478/00003780	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 髙田瑞希・長谷川晃	４．巻 15
２．論文標題 精神障害者に対するスティグマを規定する要因 ―精神障害者との接触体験と4つの個人差要因の影響―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 東海学院大学紀要	６．最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24478/00003774	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Hasegawa, A., Matsumoto, N., Yamashita, Y., Tanaka, K., Kawaguchi, J., & Yamamoto, T.	４．巻 86
２．論文標題 Response inhibition deficits are positively associated with trait rumination, but attentional inhibition deficits are not: aggressive behaviors and interpersonal stressors as mediators	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Psychological Research	６．最初と最後の頁 858-870
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s00426-021-01537-y	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Hasegawa, A., Somatori, K., Nishimura, H., Hattori, Y., & Kunisato, Y.	4．巻 155
2．論文標題 Depression, Rumination, and Impulsive Action: A Latent Variable Approach to Behavioral Impulsivity	5．発行年 2021年
3．雑誌名 The Journal of Psychology	6．最初と最後の頁 717-737
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/00223980.2021.1956871	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Hasegawa, A., Matsumoto, N., Yamashita, Y., Tanaka, K., Kawaguchi, J., & Yamamoto, T.	4．巻 62
2．論文標題 Do shorter inter‐stimulus intervals in the go/no‐go task enable better assessment of response inhibition?	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Scandinavian Journal of Psychology	6．最初と最後の頁 118-124
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/sjop.12679	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Horibe, K. & Hasegawa, A.	4．巻 39
2．論文標題 How Autistic Traits, Inattention and Hyperactivity-Impulsivity Symptoms Influence Depression in Nonclinical Undergraduate Students? Mediating Role of Depressive Rumination	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Current Psychology	6．最初と最後の頁 1543-1551
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s12144-018-9853-3	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Relationship between rumination and imbalanced working memory: Analysis at the latent variable and individual tasks levels.	4．巻 －
2．論文標題 Relationship between trait rumination and imbalanced working memory: Analysis at the latent variable and individual task levels	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Current Psychology	6．最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s12144-020-00804-2	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Shimono, Y., Hasegawa, A., Tsuchihara, K., Tanaka, K., Matsuda, Y., & Kunisato, Y.	4．巻 —
2．論文標題 Longitudinal association between autistic traits and affinity for hikikomori in Japanese university students	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Current Psychology	6．最初と最後の頁 —
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s12144-020-01287-x	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 —

1．著者名 矢嶋美保・長谷川晃	4．巻 27
2．論文標題 家族機能が中学生の社交不安に及ぼす影響：日本の親子のデータを用いた検討	5．発行年 2020年
3．雑誌名 感情心理学研究	6．最初と最後の頁 83-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4092/jsre.27.3_83	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 —

1．著者名 堀綾華・長谷川晃	4．巻 14
2．論文標題 中学生の不登校傾向が母親の精神的健康と家族機能に与える影響	5．発行年 2020年
3．雑誌名 東海学院大学紀要	6．最初と最後の頁 67-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 —

1．著者名 菊地勇太・長谷川晃	4．巻 14
2．論文標題 共感性が社会的スキル、攻撃性、および友人関係満足感を介して抑うつに与える影響	5．発行年 2020年
3．雑誌名 東海学院大学紀要	6．最初と最後の頁 31-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 —

1．著者名 Hasegawa, A., Somatori, K., Nishimura, H., Hattori, Y., & Kunisato, Y.	4．巻 10
2．論文標題 Associations between self-reported impulsivity and a latent variable of impulsive action constructed from three laboratory tasks.	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Associations between self-reported impulsivity and a latent variable of impulsive action constructed from three laboratory tasks.	6．最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 下野有紀・長谷川晃・土原浩平・国里愛彦	4．巻 27
2．論文標題 大学生用ひきこもり親和性尺度の作成	5．発行年 2020年
3．雑誌名 感情心理学研究	6．最初と最後の頁 51-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 山内美香・長谷川晃	4．巻 13
2．論文標題 両親の夫婦関係の認知が大学生の共感性と向社会的行動に与える影響：親の養育態度を媒介変数として	5．発行年 2019年
3．雑誌名 東海学院大学紀要	6．最初と最後の頁 89-97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 塚本亮太・長谷川晃・服部陽介	4．巻 13
2．論文標題 ネガティブな内容の自己開示の動機がネガティブな反すうと抑うつに与える影響	5．発行年 2019年
3．雑誌名 東海学院大学紀要	6．最初と最後の頁 55-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 田中奈津美・長谷川晃	4．巻 26
2．論文標題 大学生の両親に対する行動と両親からのソーシャル・サポート，家族機能，抑うつの関連	5．発行年 2019年
3．雑誌名 感情心理学研究	6．最初と最後の頁 36-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 堀綾華・長谷川晃	4．巻 12
2．論文標題 親の養育態度が大学生の不登校傾向に及ぼす影響：賞賛獲得欲求・拒否回避欲求および対人ストレスを媒介変数として	5．発行年 2018年
3．雑誌名 東海学院大学紀要	6．最初と最後の頁 29-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計11件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 中村志津香・小林正法・松本昇・長谷川晃
2．発表標題 制御困難な思考や記憶を理解する：基礎研究から産業・労働分野における諸問題
3．学会等名 日本認知・行動療法学会第47回大会
4．発表年 2021年

1．発表者名 高井茂行・長谷川晃・重松潤
2．発表標題 幸福感の重視と反すうの関連
3．学会等名 日本認知・行動療法学会第47回大会
4．発表年 2021年

１．発表者名 長谷川晃・大浦真一・国里愛彦・山本哲也・福井義一
２．発表標題 ネガティブな独立・従属出来事尺度の作成：ストレス生成仮説の検証に向けて
３．学会等名 日本認知・行動療法学会第47回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 大井瞳・西村春輝・長谷川晃
２．発表標題 状態反すう尺度（Brief State Rumination Inventory）の日本語版作成および信頼性・妥当性の検証
３．学会等名 日本心理学会第85回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 抑制機能の2下位分類と反すうの関連：反応抑制と注意の抑制の比較
２．発表標題 長谷川晃・松本昇・山下裕子・田中圭介・川口潤・山本哲也
３．学会等名 日本心理学会第85回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 長谷川晃・杣取恵太・西村春輝・服部陽介・国里愛彦
２．発表標題 衝動的行為と反すうが抑うつを強める過程：行動的衝動性に対する潜在変数アプローチを適用して
３．学会等名 日本心理学会第83回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 長谷川晃・杣取恵太・西村春輝・服部陽介・国里愛彦
２．発表標題 質問紙と実験課題で測定された衝動性の関連：行動的衝動性に対する潜在変数アプローチを適用して
３．学会等名 日本認知・行動療法学会第44回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 下野有紀・長谷川晃・土原浩平・国里愛彦
２．発表標題 大学生用ひきこもり親和性尺度の作成
３．学会等名 日本認知・行動療法学会第44回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 堀綾華・長谷川晃
２．発表標題 親の養育態度が大学生の不登校傾向に及ぼす影響：賞賛獲得欲求・拒否回避欲求および対人ストレスを媒介変数として
３．学会等名 日本認知・行動療法学会第44回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 塚本亮太・長谷川晃
２．発表標題 ネガティブな内容の自己開示動機尺度の作成と信頼性・妥当性の検討
３．学会等名 日本認知・行動療法学会第44回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 北田里奈・長谷川晃・願興寺礼子
２．発表標題 認知行動的心理教育プログラムの援助者の違いが主観的幸福感や抑うつに及ぼす影響
３．学会等名 日本認知・行動療法学会第44回大会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計5件

１．著者名 長谷川晃（飯田 沙依亜、榊原 良太、手塚 洋介（編））	４．発行年 2022年
２．出版社 北大路書房	５．総ページ数 432
３．書名 Topic 13　気分障害への介入、『感情制御ハンドブック』	

１．著者名 長谷川晃（鈴木公啓・荒川歩・太幡直也・友野隆成（著））	４．発行年 2018年
２．出版社 ナカニシヤ出版	５．総ページ数 160
３．書名 日本語版抑うつ状態チェックリスト改訂版、『パーソナリティ心理学入門』	

１．著者名 長谷川晃（有光興記・石川隆行・大平英樹・榊原良太・澤田匡人・中村真・樋口匡貴・武藤世良・湯川進太郎（編））	４．発行年 2019年
２．出版社 北大路書房	５．総ページ数 472
３．書名 17章　青年期・成人期の感情障害、トピック　日本における抑うつと反すうの関連、『感情心理学ハンドブック』	

１．著者名 長谷川晃（杉浦義典（編）） 	４．発行年 2019年
２．出版社 遠見書房 	５．総ページ数 197
３．書名 第3章　感情と認知的評価、『公認心理師の基礎と実践　第8巻　感情・人格心理学』 	

１．著者名 長谷川晃（日本認知・行動療法学会（編）） 	４．発行年 2019年
２．出版社 丸善出版 	５．総ページ数 798
３．書名 2-19　うつ病の認知モデルの基礎研究、5-31　CBTの展開：うつ病に対する新たなアプローチ、『認知行動療法事典』 	

〔産業財産権〕

〔その他〕

国際医療福祉大学赤坂心理・医療福祉マネジメント学部心理学科　長谷川晃のホームページ　http://ahasegawa.com/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関